

灰色かび病情報第1号

令和2年1月31日
愛知県農業総合試験場
環境基盤研究部病害虫防除室

灰色かび病の発生に注意しましょう！

1 発生状況

1月下旬に行った巡回調査において、キュウリの灰色かび病発病果率は0.75%（平年0.40%、前年0.25%）、イチゴの発病果率は1.07%（平年0.67%、前年0.11%）で、過去10年と比較し、ともに過去3番目に多い状況でした。

灰色かび病は多湿のときに発生しやすくなります。12月から1月にかけて降水量が多く、日照時間が少なく、施設内が乾きにくい条件が続きました。また、気温が高く、暖房機の稼働時間が短くなり、施設内が乾きにくくなっています。

名古屋地方气象台1月30日発表の1か月予報によれば、向こう1か月の平均気温は高い確率70%です。今後も施設内が多湿になりやすい気象が続くため、灰色かび病の発生に注意が必要です。

2 本病の生態等

本病の病原菌は糸状菌です。多犯性で、キュウリ、イチゴ、トマト、ナスなど多くの野菜、花き類、果樹類を侵します（図1～6）。

病原菌は傷口や、咲き終わってしぼんだ花卉などの枯死した部分から侵入し、そこで増殖した菌が有力な伝染源となります。

発育適温は23℃前後です。湿度が高いと盛んに胞子を形成し、周囲に飛散します。菌糸、分生胞子の形で被害組織中に残存し、次作の伝染源となります。



図1 灰色のカビが密生した
キュウリの幼果



図2 灰色のカビが密生した
イチゴ果実



図3 灰色のカビが密生した
トマト果実



図4 トマト果実のゴーストスポット
(白色リング状の病斑)



図5 輪紋状の病斑上に灰色の
カビが密生したナス果実



図6 ナスの葉にできた輪紋状の病斑

3 防除対策

- (1) 病原菌は傷口や枯死した部分から侵入します。花卉から侵入することが多いため、開花後のしぼんだ花卉を摘み取りましょう。
- (2) 施設内が多湿になると発病が多くなるので、過剰なかん水を避け、換気を行いましょ
う。
- (3) 発病前から予防散布を行いましょ。
- (4) 同系統の殺菌剤を連用すると、殺菌剤耐性菌の発生リスクが高まります。
特に本病は薬剤感受性の低下に関する報告が多く、耐性を獲得しやすい病原菌です。
耐性菌発生を防ぐため、FRACコード表を参照して、異なる作用の殺菌剤をローテー
ション散布しましょ。
(FRACコードの詳細は、https://www.jcpa.or.jp/labo/jfrac/pdf/code_pdf01.pdf を参照)
- (5) 被害果、被害葉は伝染源となるので、発見したら速やかにほ場外に持ち出し、適切
に処分しましょ。